神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

On the concept of "Heresy" in medieval Russian chronicles

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2010-11-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 岡本, 崇男
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/460

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

中世ロシア年代記における「異端」の概念について*

岡　本　崇　男

1．「レオンチーの異端」（1164年）

『ラヴレンチー年代記』の6672年（西暦1164年）の記事に「レオンチーの異端」（Леонтиевская ересь）という出来事が記録されている（第118葉表）。この年代記の記述にもとづいて事件の概要を説明すると以下のようになる。

西暦1164年にロストフの主教レオンチーがスーズダリの町で厳格な斎戒の遵守を説いたために教会内部で論争が起き，ヴラヂーミル公アンドレイ臨席のもとで討論が行われて，レオンチーがキエフ府主教に論駁される。この結果を不満としたレオンチーは，ギリシャ正教会の最高指導者である総主教の裁定を仰ぐためにコンスタンティノープルに向かうが，その途中でビザンツ皇帝の一行に遭遇し，皇帝とルーシからの使者達が見守る前でブルガリア主教と論争するも再び敗れてしまう。そしてレオンチーは皇帝を非難したために皇帝の部下たちに首を打ち据えられて川に沈められそうになった。

しかし，この事件にはわからないことが多い。比較的短いテキストの中に，三人の聖職者（ロストフ主教，キエフ府主教，ブルガリア主教）と二人

＊　本論文は文部科学省科学研究費補助金による成果の一つである（基盤研究(B),「ロシア諸年代記の正本と異本の PC 利用による比較対象研究とその応用」，平成20年度～22年度．課題番号：20320050．研究代表者：名古屋学院大学教授・中條直樹）．

の権力者（ヴラヂーミル公，ビザンツ皇帝）が登場し，主役であるレオンチーが活発に地理的な移動をしているために，テキスト中で直接言及された，あるいは暗示された他の人物がレオンチーとどのような関係にあったのかがよくわからない。また，これらの人々が属する地域同士の関係についても全く説明されていない。そして，もっとも理解に苦しむのは，このテキストのテーマである厳格な斎戒，すなわち水曜日と金曜日には，降誕祭のような主の祭日であっても肉を食べないという「原則主義」が「異端」とされたという事実である。さらに，原則主義者の行為を「異端」と断罪した聖職者たちは，あきらかに世俗の権力者（ヴラヂーミル公，ビザンツ皇帝）の声を代弁しているのである。

それではなぜ ЕРЕСЬ（「異端，背教」）とか ЕРЕТИКЪ（「背教者」）という言葉がここで使われているのであろうか。本論文では，これら三つの例がどのような文脈に置かれているかを検討し，「異端」にまつわる語彙が使用される際の判断基準を探ってみたい。

2.「異端」という言葉の意味

「異端」を意味する名詞 ЕРЕСЬ およびこれと派生関係にある名詞 ЕРЕТИКЪ や形容詞 ЕРЕТИЧЕСКИИ のような単語が年代記に現れる頻度はそれほど高くない。この『ラヴレンチー年代記』の前半部，いわゆる『過ぎし年月の物語』（あるいは『原初年代記』）では ЕРЕТИКЪ が一回出現するのみである。そして，後半部を構成しているいわゆる『スーズダリ年代記』でも，冒頭で紹介した事件の箇所に ЕРЕСЬ が一度，そして6677年（1169年）の記事の中でヴラヂーミルの主教フェオドルについて ЕРЕТИКЪ という単語が二度使われている（第119葉裏―第120葉表）に過ぎない。

先ず，『過ぎし年月の物語』の唯一の例は988年の記事の中にある。その前段の内容はほぼ以下の通りである。

キエフ大公ヴラヂーミル・スヴャトスラーヴィチは，ビザンツ皇帝の妹アンナを自分の妻として要求し，ビザンツ帝国を脅迫するために，クリミア半島のギリシャ植民都市ヘルソネスに遠征する。皇女は異教徒の公との結婚を拒否するのだが，皇帝である二人の兄に懇願されて，泣く泣くヘルソネスに到着する。その頃，ヘルソネスもヴラヂーミルの軍事力に屈して開城し，彼を玉座に座らせるのであるが，ヴラヂーミルは突然神の意志によって視力を失ってしまう。そこで，アンナは彼に使者を送って病から逃れたければ洗礼を受けるようにと忠告し，彼はその通りに受洗すると，目が見えるようになった。

そして，この直後に以下の一節が置かれている。

крьщену же Володимеру. предаша ему вѣру крьстияньску. рекуще сице. да не прельстять тебе нѣции от *еретикъ*. но вѣруи сице глаголя.「ヴォロヂミルは洗礼を受けると，キリストの教えをこう言いながら伝授された。『異端者のうちのあるもの達があなたを惑わすことのないように，あなたはこう言いながら信仰してください』と」。

そして，この一節の後に「言うべき」内容が続くのであるが，このかなり長いテキストは次の言葉で始まっている。“Вѣрую во единого Бога Отьца Вседержителя. Творца небесу и земли. до конца вѣру сию…”（「わたしは全能の父，天と地の創り主である唯一の神をこの世の終わりまで信じる…」）。これは，使徒信条である。つまり，上記の「異端者」の使用例における“(нѣции от) *еретикъ*”（複数生格）は，「三位一体を認めない人々」のことを意味している。ローマ教会とコンスタンティノープル教会は９世紀頃にはかなり険悪な関係にあったことがよく知られており，11世紀に完全に分裂してしまうのだが，それ以降も双方ともに「正統派」を自認しているの

は，「三位一体」を信仰の基本としているからである。従って，この立場を認めようとしない人々こそ真の「異端者」なのであって，上記の例でЕРЕТИКЪは正しい意味で使われているということができる。

しかし，1164年のレオンチーの「異端」は，ЕРЕСЬという言葉が使われているにもかかわらず（“В то же лѣто вста *ересь* Леонтианьская...”），988年の例とは違った意味で使われていることは明らかである。

ЕРЕСЬという単語はもともとギリシャ語のαἵρεσις の訳語で，「キリスト教の教義に反する教え（およびそうした教えに従うこと）」を意味している（PPBES, I, 869-870）[1]。そしてЕРЕТИКЪは「ЕРЕСЬを実践する人」だということになる。ただし，この単語が使用される際の判断基準となる「キリスト教の教義」は絶対的なものではない。宗派が違うということは，教義にも違いがあるということである。例えば，1054年にローマとコンスタンティノープルの総主教座が離反するまでのЕРЕСЬは，主として三位一体を否定する教えのことであったが，教会分裂以降はローマ・カトリック教会と東方正教会は一方が他方の教えをЕРЕСЬだとして非難したのであった。

このように何を「異端」と言い，誰を「異端者」と呼ぶのかは，相対的な基準に依拠している。おそらくこのことが理由となって，ЕРЕСЬは教会の

1　ギリシャ語αἵρεσις が「背教者」の意味を持つようになるのは，キリスト教の成立期以前には遡れないので，それ以前は「取ること」，「選ぶこと」などの意味を持っていた。また，この単語が新約聖書でサドカイ派やファリサイ派などの「宗派」（宗教上の派閥）を意味していたこともわかっている。例えば，Εξανέστησαν δέ τινες τῶν ἀπο *τῆς αἱρέσεως* τῶν Φαρισαίων πεπιστευκότες λέγοντες「ところが，ファリサイ派から入信した人々が数人立って言った」（使徒行伝15,5）；τῆς τῶν Ναζωραίων *αἱρέσεως*「ナゾラ人（びと）たちの分派の」（使徒行伝24,5）など（訳文はINT2に従った）。後者の例に付けられたINT2の脚注には次のことが書かれている。「hairesis は紀元後二世紀以降，キリスト教の『異端』に当てられるギリシャ語であるが，本書が前提としている時代のユダヤ教に『諸派』あるいは『分派』はあっても『異端』はなかった。ここに『異端』の訳を当てる（口語訳）べきではない」（引用中の「口語訳」とは1955年に日本聖書教会が出版した口語訳聖書のことを指している）。ちなみに，スラヴ語のеретикъに対応するギリシャ語αἱρετικός もINT5では「分派を作っている者」と解釈されている。しかし，スラヴ人がキリスト教を受け入れた時にはすでに「異端」，「背教」の概念が確立していたのであるから，やはりересь, еретикъもキエフ・ルーシにおいては先ずこれらキリスト教的な概念と結び付いていたと思われる。

規則を破ること全般を意味するようになり，さらに転じて「主流の考え方や規則に外れること」であれば何でも「異端」だということになってしまう（SR による）。

ЕРЕСЬ が本来の宗教的な意味以外に，転義として社会的な意味を持っていることは，この語彙が日本語の「異端」とパラレルな関係にあるということであり，おそらく普遍的，常識的な現象であるのかもしれない（ただし，日本語の場合，「背教」・「背教者」は「異端」・「異端者」とやや違ったニュアンスを持っているように思われる）。

中世ロシア語辞典（Srez と SR）の ЕРЕСЬ や ЕРЕТИКЪ などの語彙の語義と例文との関係を見る限り，これらの語彙が「背教」・「背教者」という本来の意味，あるいは「教会の規則に違反すること」・「教会規則の違反者」の意味で使用されているのは，教会法および教会の規則にかんする文書や聖職者の書簡である。一方，転義の「異端」・「異端者」が現れる文献のジャンルに制限はないように思われる。たとえば，「主流の考え方や規則に外れること」の意味か，場合によっては「非キリスト教徒」の意味で使われている。（Sres には «Придоша Болгаре вѣры Бехметевы еретига»「異端者マホメットの信仰を持つブルガールたちがやってきた」のような例文が収められている）。

３．「レオンチーの異端」が起こった事情

既に述べたように，この事件を記述するにあたって，年代記作家が比較的短いテキストの中に多くの人名と地名が詰め込んでしまったために，出来事の経過が非常にわかりにくくなっている。古代ルーシの外交政策を扱った V.T. パシュートの著作によれば，この事件の背景にはビザンツ帝国とルーシ諸公国との政治的な関係，ビザンツ教会とルーシのギリシャ正教会との関係，そして世俗の権力（ビザンツ皇帝，ルーシ諸公）とキリスト教会との関係が複雑に絡み合っていたらしい。以下に，その概要を［Pashuto, 190-

193］の記述を中心にしてまとめておく。[2]

1156年にユーリー・ヴラヂーミロヴィチ（「手長公」）がキエフ大公となる。同じ年にキエフ府主教としてコンスタンティノープルから赴任したコンスタンティノスは，ポロツク主教およびスモレンスク主教の支持を受けて，かつてのキエフ大公でユーリーと敵対関係にあったイジャスラフ・ムスチスラヴィチ（故人―1154年没）を破門する。そして，このイジャスラフによって1147年に府主教に指名されたクリメントが任命した主教たちが全員解任されてしまう。

この出来事からイジャスラフ・ムスチスラヴィチとクリメントが一つの派閥を形成していたことがわかる。実は，クリメントはキエフ大公イジャスラフが招集した主教会議で府主教に選出されたのであるが，コンスタンティノープル総主教の許可を得ていなかった。当時はまだ歴代の府主教の多くがコンスタンティノープルから派遣されたギリシャ人であり，クリメントはかつてヤロスラフ賢公が自ら指名したイラリオンに次ぐ二人目のルーシ出身の府主教であった。つまり，ここには高位の聖職者の叙任権の問題が係っており，ルーシの教会の内部で，そして諸公の間にもギリシャ派とルーシ派の対立が起こったらしい。

ギリシャ人府主教コンスタンティノスがクリメントの配下の主教を全員解任できたのは，大公ユーリーの支持があったことを暗示している。ユーリーは翌年死亡するので，ルーシの教会がビザンツ教会の管理下にあることをどう考えていたのかについては何もわからないのだが，かつて敵対していたイジャスラフの派閥に属する聖職者であるので，ギリシャ派の処置を支持あるいは黙認したと思われる。

2　この事件について概説したものは少なくないが，本論文では Pashuto（V.T. パシュート，『古ルーシの外交政策』，1968年），Prishelkov（M.D. プリショールコフ，『10-12世紀キエフ・ルーシの教会・政治史概説』，2003年），Podskalsky（G. ポドスカルスキ，『キエフ・ルーシ（988-1237）におけるキリスト教と神学文献』，1982年），Makarij（府主教マカーリー，『ロシア教会史』第２巻，1995年）の解説が主たる情報源となっている。

ルーシ派主教を追放すると，府主教は自分の配下のギリシャ人主教たちをその後任に据える。この時，スーズダリに送り込まれたのが主教レオンチー（レオンティオス）なのである。しかし，この人は最初からスーズダリで歓迎されていなかった。スーズダリを統治していたのはユーリーの息子であるアンドレイ（「愛神公」）であったのだが，この人は前任者ネストルと良好な関係にあったらく，父と違って積極的なルーシ派に属していた。

1159年にロスチスラフ・ムスチスラヴィチ（イジャスラフ・ムスチスラヴィチの弟）がキエフ大公の座につくと，ルーシ派が勢力を盛り返そうとしてクリメントの府主教復帰を主張するのだが，ビザンツ帝国との関係悪化を懸念した大公は，クリメントでもコンスタンティノスでもない第三者のテオドロスをコンスタンティノープルから迎え入れる。退任を余儀なくされたコンスタンティノスはチェルニゴフ公スヴャトスラフ・フセヴォロドヴィチの元に身を寄せて同じ年に亡くなる。チェルニゴフ公はギリシャ派なのである。しかし，キエフ大公は立場を明確にしていない。

中立的な府主教を迎えたことで，ギリシャ派の勢力が弱まったらしく，主教レオンチーもスーズダリから追放されてしまう。しかし，ロストフにいたユーリー手長公の未亡人とその二人の息子がレオンチーを受け入れる。つまり，ユーリーの妻と子らはギリシャ派が多く，アンドレイはこの家系ではむしろ少数派なのであった。しかし，ヴラヂーミル・スーズダリ公国の支配者であるアンドレイは，1162年にギリシャ派に属していた義理の母とその息子たち，そして自分の兄弟と従兄弟たちと主教レオンチーをビザンツ帝国に追放するという思い切った処置に踏み切る。

ところが，後にアンドレイはレオンチーを呼び戻す。ただし，スーズダリではなく，ロストフに居住させる。そして，この町でレオンチーが例外のない斎戒遵守をスーズダリで説き始めるのである。しかし，水曜日か金曜日であっても主の祭日であれば肉食が許されることに慣れていたスーズダリの住民やアンドレイ公，そして聖職者たちも反発し，中立派の府主教テオドロス

を招いて公開討論会が開かれる。そして，討論の場でレオンチーはテオドロスに異端宣告を受けてしまったので，ギリシャ正教会の最高位にある総主教の裁定を仰ぐためにコンスタンティノープルに向かったのであった。[3]

ところで，斎戒にかんするビザンツ教会とルーシの教会との解釈の違いがいつどのような理由で起こったのかということについては何もわかっていないようなのだが，「すでに11世紀に修道院長フェオドーシーによる証言がある」という［Pashuto, 192］。パシュートが根拠としている証言は，府主教マカーリーの『ロシア教会史』（サンクトペテルブルグ，1868年）の第２冊第２巻の付録に収められている洞窟修道院修道士フェオドーシー（ca 1036-1091）がキエフ大公イジャスラフ・ヤロスラヴィチ（1024—1078）に宛てた書簡である。[4] この中でフェオドーシーは，「水曜日にユダヤ人がイエスに対して謀議し，金曜日に主を磔にした」ことがこの両日に斎戒することの根拠であると述べている。ちなみに，「俗人（белци）は肉と乳を断ち，修道士（черньци）はチーズを断つ」という。しかし，書簡の最後には，「わたしたちには聖使徒達から受け継いだ言い習わしがあって，主の祭日，聖母の祭日，そしてあらゆる聖者の祭日には聖使徒達を記念して心で祝い，あなた方

3　『ラヴレンチー年代記』では，レオンチーの異端騒ぎが1164年の出来事になっているのだが，別系統の『イパーチー年代記』で1162年の記事の中に収められている。そして，16世紀に編纂された国史的性格を持つ『ニーコン年代記』では1160年にこの事件があったことになっている。この問題については，公開討論に登場した «владыка Феодоръ» をパシュートの見解に従ってキエフ府主教テオドロスだとすると，1163年以前の出来事だと考えなければならない。なぜなら，テオドロスは1163年６月に死亡しているからである。ちなみに，パシュートもこの事実は認めている。これを主要な根拠として Podskalsky, 291では論争が行われたのが1161年か1162年の始め頃だと推定している。一方，レオンチーがコンスタンティノープルに向かう途中にビザンツ皇帝の一行に遭遇し，討論した相手であるブルガリア主教アドリアンという事物の特定を目的とした論文 Prinzing, 555-556によれば，アドリアンと推定される人物は1164年２月10日に死亡しているので，遅くとも皇帝臨席のもとに行われた討論会は1163年の真夏か晩夏までであるという。したがって，スーズダリで起きた異端騒動はそれよりも前に起きていなければならない。なお，この事件を1160年のこととした『ニーコン年代記』では，対論者の名前が «епископъ Феодоръ» となっており，人名索引によれば，数年後にもう一つの異端騒ぎを起こすロストフ主教フェオドルその人である。これは事実誤認である可能性が高い。

4　本論文で使用した府主教マカーリーの『ロシア教会史』は1868年版ではなく，1995年に公開された現代正書法のものである。

の余った食べ物を貧しい人々に食べさせることになっています。（中略）もしあなたが水曜日と金曜日に肉を食べてはならないと教父に決められているのであれば，その人から許可をもらって下さい。あるいは（もし食べてしまったとしても）あなたご自身が（今後は食べないと）約束なさるなら，神はわたしに免じてあなたをお許しになります。主の祭日が水曜日か金曜日になってしまったら，あるいは聖母や十二使徒の祭日がそうであれば，肉を食べて下さい」と書かれている。イジャスラフ公とフェオドーシーの生涯が重なるのが11世紀の中期であるので，すでにその頃には少なくとも俗人はなぜ斎戒せねばならないかということに対して疑問を抱いており，水曜日か金曜日であっても祭日には肉を食べることが習慣化していたことがこの書簡の内容から伺い知れる。そして，この慣習は更に一世紀続き，完全にルーシの風土に根付いていたようである。

さて，スーズダリを去ったレオンチーは，チェルニゴフ公スヴャトスラフ・オリゴヴィチ[5]の居所に立ち寄り，公の慰撫を受ける。甥のスヴャトスラフ・フセヴォロドヴィチと同様にこのチェルニゴフ公も明らかにギリシャ派であり，政治的にはヴラヂーミル・スーズダリのアンドレイと対立関係にあった。

次に，レオンチーはキエフに立ち寄る。すでに府主教テオドロスは亡くなっていたため，レオンチーはキエフ大公の支持を取り付けようとしたのだが，大公ロスチスラフは，おそらく国内のギリシャ派とルーシ派のバランスを考慮して，レオンチーを支持せず，ルーシ派府主教クリメントの復帰の可能性についてビザンツ側に打診する。ただし，これは認められなかったようで，皇帝の使節に付き添われたヨハンネス（ヨアン）４世が府主教としてキエフに到着する［Podskalsky, 291］。ただし，この人物がどちらの派閥に近いのかはわかっていない。

そして，レオンチーはコンスタンティノープルに向かうのであるが，その

5 『イーゴリ遠征譚』の主人公イーゴリの父親である。

途中でなぜかビザンツ皇帝マヌエル１世・コムネーノスの一行に遭遇する。皇帝はハンガリーとの戦争の準備のために，ある川の畔に陣を張っていたのであった。[6] そこで，レオンチーは皇帝とルーシ諸公国からの使節[7]の眼前でブルガリア主教アドリアンと論争し，また敗れてしまう。つまり，皇帝はギリシャ派聖職者の主張を退けて，ルーシ派の庇護者であるアンドレイ公を支持したのであった。

以上が，「レオンチーの異端」の顛末である。このことからわかるのは，宗教上の問題を純粋に教義にかかわる問題と考える人と，政治的な視点で判断しようとする人とがいたということである。

４．年代記における ЕРЕСЬ, ЕРЕТИКЪ の判定基準

『ラヴレンチー年代記』の1168年の記事にまた斎戒の問題が記録されている。今度は，キエフ府主教コンスタンティノス２世が洞窟修道院長ポリカルプに対して，水曜日と金曜日には例外なくバターとチーズを断つように命じている。そして，チェルニゴフ主教アントニオスが府主教を支持している。この年，府主教ヨハンネス４世が亡くなって，新たにその地位に就いたコンスタンティノス２世は１世[8]と同じくギリシャ派なのであった。ただし，チェルニゴフ公はビザンツ式の斎戒を強制する主教アントニオスを嫌って，主教座から追放してしまう。代々のチェルニゴフ公は熱心なギリシャ派であったのだが，このとき多少変化が起きたのかもしれない。いずれにしても，ここ

6　『ラヴレンチー年代記』には（そして他の年代記にも）川の名前は書かれていない。Prinzing, 553によれば，皇帝の軍は，ドナウ川から支流のサヴァ川に続く当時のビザンツ帝国とハンガリーとの国境地帯のどこかに陣営を設けて，ハンガリーの情勢を観察していたらしい。ただし，この河川伝いの国境線はかなり西よりであって，東端が現在のベオグラード付近であり，コンスタンティノーブルとはかなり方向が違っている。従って，レオンチーはコンスタンティノープル総主教に会いにいったのではなく，最初から皇帝の裁定を求めていたのかもしれない。ちなにみに，皇帝と行動を共にしていたブルガリア主教アドリアンは，皇帝の伯父（または叔父）であるという［Prinzing, 554］。

7　なぜ，ルーシ諸公国の使節がビザンツ皇帝の国境線視察に同行していたのかについて詳しいことはわかっていない。パシュートは，ガリチ，キエフ，スーズダリなど様々な諸公国との関係強化を模索していたと述べている［Pashuto, 193］。

8　ユーリー手長公がキエフ大公座に就いた時の府主教。

で注目に値するのは，ЕРЕСЬとかЕРЕТИКЪという言葉が見当たらないということである。この逸話の前段はヴラヂーミル・スーズダリ公アンドレイが派遣した諸公の連合軍がキエフを攻撃し，当時のキエフ大公ムスチスラフ・イジャスラヴィチが逃走し，その後キエフの教会と修道院の略奪が三日続いたという話であり，この事件に対する年代記作家の意見として「これが起こったのは彼ら（キエフ大公たち）の罪のためなのであるが，それよりも府主教の不義が理由なのである」（“се же здѣяся за грѣхы ихъ. паче же за митрополичю неправду”）と書かれている。確かに，НЕПРАВДАというのは「不義」，「精神的な罪」なのであるが，13の使用例（『過ぎし年月の物語』に1例，『スーズダリ年代記』に12例）があることから，ЕРЕСЬほど特殊な語彙ではないと思われる。

1168年の斎戒の問題と「レオンチーの異端」事件の記述を比較すると，両者の間に一つだけ違っていることがあることに気がつく。「主の祭日やそのたの重要な祭日であっても水曜日と金曜日には斎戒せよ」というビザンツの習慣が話題になっている点はどちらも同じである。しかし，1168年の記事では当事者が明確に記されていて，府主教が洞窟修道院長に対して，チェルニゴフ主教がチェルニゴフ公に対して徹底した斎戒を説いているのだが，1164年の記事ではレオンチーが誰に対して主張したのか書かれていない。1168年のパターンを踏襲するのであれば，ロストフ主教がビザンツ式斎戒の遵守を訴える相手は，領主であるアンドレイであるはずなのだが，この名前を年代記に記録することはおそらく意図的に回避されている。

『ラヴレンチー年代記』は，本来ヴラヂーミル・スーズダリ公国の正統性を主張するために編纂された年代記であり，特に後半部のいわゆる『スーズダリ年代記』はユーリー手長公を祖とする家系の成員が常に主役となっている。中でも手長公自身とその息子アンドレイの名前の出現頻度は極めて高い。そして，アンドレイは「愛神公」（Боголюбский）という渾名で呼ばれるように，教会の建設や整備に熱心な敬虔な公として描かれている。

このキリスト教徒の鏡のような公が，たとえルーシの教会の習慣とは相容れないとはいえ，原則的なビザンツの斎戒遵守をギリシャ派主教がアンドレイに説き，それを煩わしく思ったアンドレイがその主教を追放したと書くことは，編纂者である修道士ラヴレンチーにも，そして後の時代の写字生にもできなかったのだと思われる。また，［Priselkov, 219］で示唆されているように，斎戒の問題についてキエフ諸公とビザンツ皇帝との間で政治的な決着が付けられたのかもしれない。つまり，キエフ大公ロスチスラフはビザンツ教会の首長である皇帝マヌイル１世にルーシ出身の元キエフ府主教クリメント（クリム）の復帰を願い出て受け入れられずに，ギリシャ人府主教ヨハンネス４世を迎えることに同意するのだが，その代償としてビザンツ側からいくつか譲歩を引き出した。その中に，ルーシの教会独自の斎戒の慣行を認めることも含まれていたと可能性があるという。あくまでも推測の域を出ていないとはいえ，斎戒問題が『ラヴレンチー年代記』で取り上げられているのが1164年と1168年の記事以外にはないことは，この仮説を裏付けていると思われる。仮にそうだとすると，ビザンツ帝国と皇帝の意を受けた教会によって公的に認められたルーシの習慣に異を唱える聖職者を「正統から外れた者」という意味での「異端者」だと断じることに説得力が生まれる。

ただし，ここで注意しなければならないのは，主教レオンチーは年代記の中で一度も ЕРЕТИКЪ だとは言われてないということである。キエフ府主教とブルガリア主教を相手に論争を挑んだが，二度とも論破されたと書かれているにすぎない（«...и оупрѣ его вл(а)∂(ы)ка Феодоръ»; «а тамо оупрѣлъ и Анъдриянъ еп(и)с(ко)пъ» — いずれの例も1164年の記事より）。その代わり，«В то же лѣ*т* вста ересь Леонтианьская»「同じ年，レオンチーの異端が起きた」と明記されているので，ロストフの主教レオンチーが公式に「異端者」の裁定を受けたと考えざるを得ない。

これとは対照的な言葉の使い方を，『ラヴレンチー年代記』の1169年の記事に見ることができる。ここではロストフ主教フェオドレツ（フェオドル）

の乱行とその結末に関して，先の主教レオンチーの事件とは比較にならないほど詳しく事件の経緯の報告が行われている。そして，この経過説明の中にЕРЕТИКЪという単語が使われているのである。

> ...посла же его Андрѣи митрополиту в Кыевъ. митрополитъ же Костянтинъ повелѣ ему языкъ урѣзати. яко злодѣю и *еретику*. и руку правую утяти. и очи ему выняти. зане хулу измолви на с(вя)тую Б(огороди)цю...（第119葉裏）
>
> アンドレイ（公）は彼（フェオドレツ）をキエフの府主教の元に遣った。すると府主教コンスタンチノスは，悪人と異端者にするように，彼（フェオドレツ）の舌を切り取り，右手を切り落とし，彼の両目を刳り貫くよう命じた。なぜなら彼が聖母を冒涜する言葉を発したからである。

ここで注意しなければならないのは，年代記作家はフェオドレツが異端者の裁定を受けたと言っているのではなく，「悪人として異端者として」（«яко злодѣю и еретику»）扱われたと言っているに過ぎないということである。この接続詞 яко によって導かれている挿入句は，名詞の格形式（злодѣю, еретику）を見ればわかるように，直前の三人称代名詞 ему と一致している。つまり，キエフ府主教は「悪人や異端者の舌を切り取るように，彼の舌を切り取るよう命じた」のである。ただし，府主教マカーリーが『ロシア教会史』の中でこの主教について三度「不幸な」（несчастный）と形容しているように［Makarij, 297, 397, 414］，フェオドレツに死刑の裁定が下ったのは，聖職者としての態度が常軌を外れていたからではなく，何か別の理由でこのような措置が取られた可能性が高いようである。公式に異端を宣告されたが死刑には処せられなかった主教レオンチーよりもフェオドレツの方が重い罪を犯したのであろうか。レオンチーの事件の記述には『ラヴ

レンチー年代記』第118葉表の前半部分が充てられているが，フェオドレツ事件の顛末については第119葉表後半から第120葉表の半ばにかけて記述されている。つまり，四倍以上の分量がある。年代記は公的な性格を持っているので，フェオドレツの処刑を正当化する必要が，教会にも世俗権力（ヴラヂーミル・スーズダリ公国）にもあったものと思われる。

結局，ЕРЕСЬ や ЕРЕТИКЪ など「異端」にかかわる語彙は，それが意味する内容が本来深刻で重要なものであるために，年代記のように編纂と執筆の主たる担い手が聖職者である文献では慎重に扱われ，結果的に出現頻度が低くならざるを得ない。また，公式の異端者ではなく，「常軌を外れた者」という転義でこれらの語彙を使用する時には，言葉を尽くして使用を正当化する必要がある。

参考文献

INT2　佐藤研・荒井献 訳，『〈新約聖書Ⅱ〉ルカ文書』。1995年。

INT5　保坂高殿・小林稔・小河陽 訳，『〈新約聖書Ⅴ〉パウロの名による書簡 公同書簡　ヨハネの黙示録』。1996年。

Makarij Макарий, митрополит Московский и Коломенский, *История русской церкви. Книга вторая. История русской церкви в период соврешенной зависимости ее от Константинопольского патриарха (988-1240)*. Москва. 1995.

PPBES *Полный православный богословский энциклопедический словарь. I-II*. 1992.

Pashuto В.Т. Пашуто, *Внешняя политика Древней Руси*. Москва. 1968.

Podskalsky Gerhard Podskalsky, *Christentum und theologische Literatur in der Kiever Rus' (988-1237)*. München. 1982.

Prinzing Günter Prinzing, Wer war der „bulgarische Bischof Adrian“ der Laurentius-Chronik sub anno 1164? *Jahrbücher für Geschichte Osteuropas* 36, 1988. H. 4.

Prishelkov М.Д. Присёлков, *Очерки по церковно-политечкской истории Киевской Руси X-XII* вв. Санкт-Петербург. 2003.

SR *Словарь русского языка XI-XVII веков*. 1984-.

Srez И.И. Срезневский, *Словарь древнерусского языка*. 1989.

資料

Nestle-Aland, *Novum Testamentum Graece*. 27. revidierte Aufl. 1993.

Полное собрание русских летописей. Том 1-й. Лаврентьевская летопись. Москва. 1997.

Полное собрание русских летописей. Том 2-й. Ипатьевская летопись. Москва. 1998.